

九州以北で新たに確認されたヤガ科害虫3種

農業環境インベントリーセンター昆虫分類研究室 吉松 慎一・安田 耕司

ヤガ科新害虫3種の確認

ガ類の中で最も種数の多いヤガ科は、現在わが国で1,300種以上が報告されており、その約1割に当たる126種が害虫として「農林有害動物・昆虫名鑑」(1987)に記録されている。しかし、環境変動や作物栽培方法の変化など様々な要因により、これまで記録のないヤガ科新害虫が発生する可能性がある。今回、主に都道府県の農業試験場や病虫害防除所などからの同定依頼により、以下のヤガ科害虫3種を新たに確認した。

クシナシスジキリヨトウ *Spodoptera cilium* (図1:A)

静岡県でヤガ科昆虫の初発生を確認し、同定したところ本種であることが確認できた。また、1999年頃以降、本種が静岡県内ゴルフ場のシバを激しく食害していたことを確認した。本種は亜熱帯・熱帯地域に分布し、九州以北では1994年に熊本県と兵庫県で成虫採集の記録があるが、発生記録はない。幼虫はシバの在来害虫スジキリヨトウ *Spodoptera depravata* に酷似している。

イラクサギンウワバ *Trichoplusia ni* (図1:B)

兵庫県で本種の広域的多発生とアブラナ科野菜など多種作物の被害を初めて確認した。海外では重要害虫として知られるが、九州以北においては僅かな発生はあったものの害虫としての認識はなかった。野菜類を食害するウワバ類としてはタマナギンウワバ *Autographa nigrisigna* が主に知られていたが、この幼虫が本種と酷似していることから識別には注意が必要である。農薬に対する感受性は両種ではかなり異なる。農薬があまり効かないウワバ類幼虫の発生報告が契機となって、本種が発見された。

ムラサキアツバ *Diomea cremata* (図1:C)

愛媛県で本種がシイタケ菌床を食害することを初めて確認した。また、神奈川県、高知県でも同様な被害を確認した。従来、シイタケは原木栽培が主流であったが、近年の菌床栽培の普及によって、本種が新たなシイタケの害虫となったと考えられる。

これら3種のヤガ科害虫は、既に他地域でも発生している可能性もあり、特に近隣の自治体では注意する必要がある。また、熱帯・亜熱帯原産の害虫が日本本土で新たに問題となる事例や作物の栽培方法の変化に伴う新害虫の発生事例は、今後も増加する可能性がある。3種

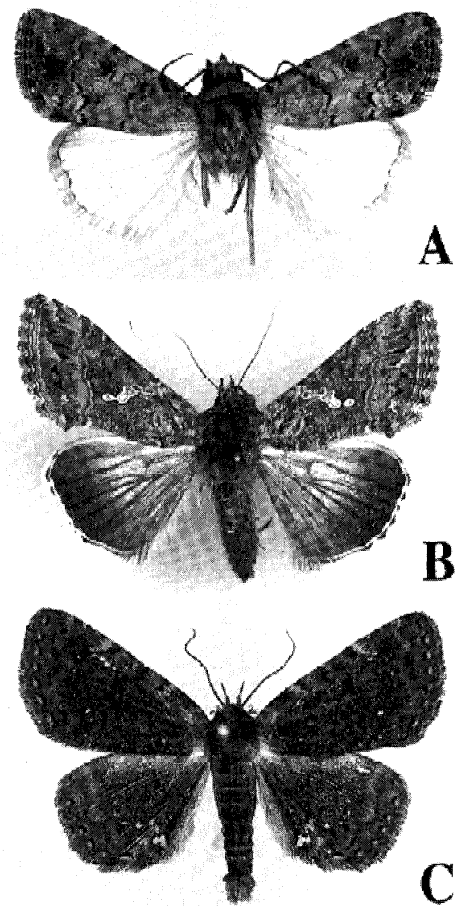


図1 ヤガ科新害虫3種の成虫

- A: クシナシスジキリヨトウ
- B: イラクサギンウワバ
- C: ムラサキアツバ

幼虫についてのより詳細な情報は、農業環境インベントリーセンター昆虫分類研究室のホームページ (<http://www.niaes.affrc.go.jp/inventry/insect/index.htm>) で公開しているので参照して欲しい。

昆虫同定依頼への対応

昆虫分類研究室は、長年にわたり都道府県の農業試験場や民間などからの昆虫同定依頼（昆虫の名前を調べて欲しいという依頼）に無料で対応してきた。ここ数年では、年平均で約100件、2,000個体程度の標本が、同定依頼として研究室宛に送られてきたり直接持ち込まれたりする。これら同定依頼された標本は、依頼者の指示が特になし限り証拠標本として昆虫標本館で保管され、寄主植物名や発生状況などのデータは1件ずつ個別に台帳に登録される。このようにして古くから蓄積されてきた標本や情報は、農業環境昆虫インベントリーの貴重な財産となる。

昆虫は種数が膨大で、現在世界で約95万種が知られているが、推定生息種数は500～5,000万種とされている。日本に限ると約2万9,000種の記録があるが、実際は10万種が分布すると推測されている。種の解明度が低いので持ち込まれた標本の同定は必ずしも簡単ではない。また、近年依頼がとみに増加してきた食品混入昆虫では、体の破損や加熱による変形などにより、同定が困難な場合も多い。現在の研究室のスタッフ3名はそれぞれ専門とする昆虫のグループが異なるが、全ての昆虫のグループをカバーしきれない。専門外の標本が持ち込まれた際には退職したOB、大学や博物館の先生などの協力を仰いでいる。また、逆に協力を依頼されることも多い。

おわりに

農業の現場においてはしばしば新しい害虫が発生する。都道府県では害虫が新しく確認されると病虫害発生予察特殊報を出したり、多発生が予測される害虫の場合は病虫害発生予察注意報を出したりすることによって農家に注意を喚起している。昆虫分類研究室は同定依頼に対応することで、農業環境の変動にともなう新害虫の発生をいち早く検出するアンテナとして機能し、農業の現場に大きく貢献している。また、今後も同定依頼に積極的に協力し、農業の基盤を支えると同時に、昆虫を環境指標として農業環境の変動を評価していきたい。

2003年7月